

## 新刊紹介

1011(1011)

治の担い手として帝国家人層に着目してきた(第Ⅶ論文)。既述の下層民全般への視点もまさにここから導かれていると考えてよからう。さらに、第Ⅳ論文においてカロリング朝期以来国王統治と官職は「聖職化」されていたが、叙任権闘争を経てその統治体制は壊滅的打撃を受け「世俗化」を余儀なくされたという見通しを与えており、こうした時代推移の中に帝国官僚としての帝国家人を位置づけ直すことが可能である。

中世都市レーゲンスブルクの社会集団を扱った第Ⅸ論文、近世南ドイツの身分制的代表制を論じた第Ⅹ論文からはボーズルの地方史家としての一面を読み取ることができ、バイエルンに生まれ、ミュンヘン大学バイエルン史研究所長や『バイエルン地域史雑誌』編集責任者を長く務めた彼にとって地方史研究はライフワークでもあった。

最後の第Ⅺ論文でボーズルはゲルマン・フランク・スラヴ・イタリア・ゲルマン・社会史と社会史という二つのカテゴリーを明確に区別する。社会史は歴史学の一専門分野に過ぎず十九・二十世

紀市民社会を分析対象とするのに適しており、その概念、類型、方法を中世史に応用することを戒める一方、社会史を構造概念を軸として汎用可能な「視座の学」としてとらえ、最終的に人類の全体史を描かんという態度表明を行っている。ここにブローデルの影響を看取することは容易であるが、ともあれ彼の抱く社会(構造)史の射程の広さは驚嘆に値しよう。

以上のように、本書にはボーズルの多様な研究成果が余すことなく収録されており、論文の選択や訳語に関して議論を重ねた関係者の労をねぎらいたい。そして最後に監訳者の一人、三宅氏の尽力によってボーズルの全蔵書が「ボーズル文庫」として明治大学図書館に収められたことを特記しておく。(大貫俊夫)

ゲルト・アルトホフ著／柳井尚子訳

## 『中世人と権力』

——「国家なき時代」のルールと駆引——

(中世ヨーロッパ万華鏡 ①)

八坂書房 二〇〇四・七刊

A5 二六六頁 二八〇〇円

「彼〔オットー大帝〕は、暗殺の陰謀に加わったわが祖父(！)についても、死刑の執行を望まれていた。しかし親しい諸侯の助言に耳を貸され、結局は祖父をバイエルン伯ベルトルトのもとへ拘留するよう命じた。全財産は没収され徹底的に分割された。そしてまる一年後、ようやく皇帝の慈悲をえて、祖父は全財産をそっくり返納にあずかったほか、まとまった額の金、それにザンテルスレーベンとグーテンスヴェーゲンの居城まで賜ることになった」。一度は死刑宣告を下された叛逆者が、「諸侯の助言」により助命されたのみか、命をねらわれた皇帝本人の「慈悲」によって、一年後には本来の財産に加えて補償の意味合いの財貨まで賜る。三権分立を前提とす

る現代の法治国家では、およそ考えられない成り行きである。しかし、事件を伝えるメールゼブルク司教ティートマルの筆致は、淡々としている。それが、あたかも当時の社会の不文の行動ルール (Spielregeln) に適った当然の行為であるかのように……

ミュンスター大学教授アルトホフは、一九九〇年代以降、夥しい数の論文・著作を通じて、中世初期・盛期の「政治的コミュニケーション」について新境地を切り開いてきた。本書は、一九九八年、彼が他の二名の中世史家とともに、一般読者向けに書き下ろした『大聖堂の影のなかの人々——中世からの新知見』の第一部の翻訳である。

第一章は、中世の支配権の特殊性を明確化するために、現代との比較を加え、前者には軍事力の独占、三権分立、そして「国家」が欠けていることを確認する。それでは、中世社会では、権力・制度に代わるいかなる要素が、紛争解決・秩序維持の手段として機能していたのか？第二章では、様々な史料を引用しつつ、協議に基づく合意形成、公の場における支配権行使の形式と機能（儀礼、象徴、演出、身振り等々）、支

配権の様々な正統化の試みについて論じられる。特に印象的なのは、こうした人的な絆に依拠した「政治的コミュニケーション」が機能不全に陥った際に生じる「支配権の危機」を扱った四節の叙述である。ルートヴィヒ敬虔帝とハインリヒ四世の事例を同時並行的に物語りながら、二つの危機の共通点と相違点が浮き彫りにされてゆく。第三章の主題は、近代へ向けての変化の予兆である。なかでも、ヘルマン・カンプの分担執筆したブルゴーニュ公国に関する分析が興味深い。中央集権化、制度化、財政の国庫化という近代的な支配形態の確立にいち早く向かいながらも、それにもまして支配者個人の人的関係がまだ重視されていたという。「結局のところ、公自身がみずからの官僚的機関の行く手に立ちただかっていたと見なさざるえないだろう」。

アルトホフは、その後本書の主題を発展的に論じた『儀礼の力——中世における象徴と支配』を公刊しているが、学界の議論は今や、彼の画期的な研究成果の受容の段階から、その有効性の再検証、あるいは他の時代・地域への適応の可否へと移行しているように思われる。本書の読了後には、服部良久氏の研究動向論文（本誌一一三—三所収）の参照を是非とも薦めたい。

ゲルマニストの手になる訳文は大変読み易く、丁寧な訳注も適宜付されている。図版のクオリティも高い。配列は原書とはかなり異なるが、内容に対応する箇所を再配置したものと推察する。（三佐川亮宏）

ジャン・ルクレール著

神崎忠昭・矢内義顕訳

### 『修道院文化入門』

——学問への愛と神への希求

知泉書館 二〇〇四・一〇刊

A5 四三四頁 六八〇〇円

本書は、フランス語の初版が世に出て半世紀近くが経つ、いわば古典的名著の待望の翻訳である。著者のルクレール（一九一〇—一九三三）は、中世における修道院文化の担い手たる著作家、とりわけクレルヴォアのベルナルドゥスの研究者として知られて